

「乳児保育」における食事援助の学び についての検討

—Eating-Feeding 相互模擬演習を体験した学生の気づきから—

遠藤 純子・小野 友紀・池谷 真梨子

A Study on the Effectiveness of Eating-Feeding Simulation Exercises

Junko Endo, Yuki Ono and Mariko Ikeya

Abstract

The authors examined the ways in which students in a nursery teacher-training course learn appropriate dietary assistance and analyzed 65 students engaging in eating-feeding simulation exercises. As a result of taking part in these exercises, students experienced increased consciousness of the act of eating. They experienced both negative and positive ways of eating-feeding, including: feeding leading to discomfort due to bad timing of the feeding, or the carer being hurried or impatient during the feeding.

These exercises helped both students who played the role of the child being fed and those who played the role of the carer to understand the eating-feeding processes. The students noted that proper feeding has a positive effect on chewing and eating and may impart a sense of peace to the children being fed. Throughout the exercise, participants came to understand that the role of a carer was not to mechanically carry food to the child's mouth, but to behave as if they enjoy eating with the children they are feeding. The authors will continue to explore better ways of nursery teacher-training.

Key words: infant childcare (乳児保育), eating behavior (食), training course (養成課程)

1. はじめに

3歳未満児の保育所利用児童数の増加に伴い、乳児保育の充実が求められている(厚生労働省, 2017)。中でも、食事は年齢が低いほど生活の中での位置づけが大きい。そのため保育者は、一人ひとりに応じた丁寧な援助をすることで、食事の場が子どもにとって幸せを感じられる場であるよう配慮すると共に、子どもの主体性を尊重した援助を積み重ね、食への興味が芽生え、生きる力の基礎が培われることを視野に入れながら、食に関する援助や環境を考えていくことが重要である。特に食のスタートとなる離乳期には摂食機能の発達、主体性や自我の芽生え、手指の発達等、あらゆる観点から子どもの姿を捉え、一人ひとりの姿に応じた食事援助を提供することが求められる。乳児保育を担う者が、子どもの発達過程を踏まえた上で現在の子どもの姿を適切に捉える視点を持ち、質の高い食事援助が実践できるよう、保育士養成課程では理論と実践を結びつけることのできる学びの機会を提供していくことが肝要であろう。

食事場面では保育者主導の援助が子どもの意思とミスマッチを起こすことも少なくない。特に自我

が芽生え始める 10 か月頃から、子どもは食事場面で自分の思いを強く示すようになるため、援助者との間に葛藤が生じやすい時期となり (Negayama, 1993; 川田ほか, 2005), 援助の難しさに悩む保育者も少なくない。筆者らも保育所での離乳期の食事場면을ビデオ分析する中で、保育者がスプーンを子どもの口に運ぶペースが子どもの咀嚼のインターバルよりも早いために、子どもが保育者の援助に拒否を示す場面や、一口量が多すぎるため子どもが拒否を示す場面等、子どもの思いと保育者の思いのミスマッチが子どもの意欲をそいでしまう場面を多く目にしてきた。ミスマッチは子どもの思いよりも保育者自身の「食べさせたい」思いが無意識のうちに勝り、援助行為に反映されたときに生じることが多いと感じるが、その遠因として、余裕をもって食事援助のできる人的環境の乏しさから効率性を優先せざるをえない状況や (遠藤・小野, 2017), 特に離乳期の食事援助に関しては養成機関で実践的に学ぶ機会が少なく、経験則によって学ばざるをえない現状があると考えられ、これらを看過することはできないであろう。離乳期の食事援助の質向上のためには、直接的な援助行為の見直しのみならず、保育の構造や養成教育等も含め、複数の視点から援助のあり方を検討していくことが求められる。

本研究では、食事援助の質向上への足がかりとして、保育士養成課程での学びに着目する。保育士養成課程では、離乳期の食事援助について学ぶ機会として、主に教科目「子どもの食と栄養」および「乳児保育」が挙げられる。厚生労働省 (2018) の「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の「教科目の教授内容」における「子どもの食と栄養」では、その内容に「子どもの発育・発達と食生活」が含まれ、その項目の 1 つとして「乳児期の授乳・離乳の意義と食生活」が記載されている。一方、「乳児保育」では、乳児保育Ⅱの内容「乳児保育における子どもの発育・発達を踏まえた生活と遊びの実際」の中の「3 歳未満児の発育・発達を踏まえた生活と援助の実際」で扱うことが想定される。しかし両教科共に講義内で取り上げる内容やボリュームは授業担当教員の裁量によるところが大きいのが現状である。また実践的な部分では、保育実習において食事場面の実際を観察し、学ぶ機会があるだろう。離乳期は発達の変遷に応じて食事形態・援助のあり方を調整していく時期であるため、実習の場で詳細にその差異を観察することにより学びを深めることが望ましいが、実習期間だけでは継続的な観察は難しく、場合によっては離乳期の食事場면을観察する機会を頂くことができないこともある。これらの現状を踏まえると、食事援助の実際について理論と実践を往還するような学びを養成課程で十分に保障できるとは言い難い状況にある。基盤となる部分を養成課程で学び、実践的な部分は現場で学ぶ側面が強いと推察される。しかし、保育士の食事援助方法の獲得は経験則に拠るところが大きいために質のばらつきがあることが指摘されており (森田・高木, 2013), 中には大人の思い通りに乳幼児の食行動を調整しようとするために、子どもの主体性が軽視される場面も見受けられる (小林, 2015)。心身の成長の基盤となる食事は、日々の子どもの生活に欠かせないものであることから、食事援助の質向上のためには、現職研修と共に養成教育の充実をさらに図っていくことが必要であろう。

食事援助に必要な学びは広範囲に及ぶものである。食事は栄養士を含めた調理従事者が調理にあたるため、保育者は子どもの発達段階を調理従事者等に的確に伝えることが求められる。そのためには、口の動きや手指の発達、食べ具合、食への意欲等のみで、どのような食形態や量が適しているのか判断できる力が必要となる。また、離乳開始から手づかみ食べの始まる 10 か月頃までは、食べるという行為において食べ物を子どもの口に運ぶのは、主に保育者の援助によるものとなる。援助の際には、

保育者は子どもの発する視線や身振り等のサインから子どもの思いを汲み取り、その思いに応じるべく、タイミングや一口量を見計りながら援助することが必要となる。そのためには、子どもの発するサインを汲み取ること、そして口の動きを観察し、咀嚼の状況を理解できる力が求められる。しかしながら、子どもの咀嚼・嚥下といった口の中で生じる一連の流れは外面から観察することが難しく、視覚的な観察だけでは理解しにくい。そのため、食事援助を学ぶにあたっては、子どもの発するサインから子どもの思いを汲み取ると共に、子どもがどのような口の動きをしているのか体感的に理解する機会が必要だと考える。本研究では、保育士養成課程の学生が「援助され食べる側」「食べることを援助する側」といった子ども・援助者双方の立場を体感的に経験する Eating-Feeding 相互模擬演習を行い、演習後に学生が記した気づきを分析することで、適切な食事援助につながる学びについて検討する。

2. 方 法

(1) 対象者

4年制の指定保育士養成施設に在籍し、「乳児保育」を受講する2年次の学生65名を対象にした。

(2) 実施時期

「乳児保育」(全15回)第8回「乳児保育における食」の授業回で実施した。実施時期は平成29年6月であった。

(3) 実施方法

実施授業指導案を表1に示す。授業前半では、DVDを視聴しながら離乳開始から完了時期までの子どもの発達(心身の発達、咀嚼の発達、口腔内の発達)について説明をし、後半で演習を実施した。演習は学生2名1組で行い、母親役(M)・子ども役(C)双方を、タイミング不一致パターン・共時的咀嚼パターンそれぞれの回で体験した(表2)。タイミング不一致パターンでは、子ども役が半量食べた時点で、母親役が次の一口を口元に持っていき、子ども役が食べ終わるまでそのまま口元で待ち続

表1 Eating-Feeding 相互模擬演習における指導案

段階	授業活動	指導上の留意点	時間
導入	乳児保育における食の重要性を知る。	朝食欠食率、子どもの貧困と食の関連等、食に関する現状と課題を伝え、保育所の、とりわけ乳児期の食の大切さを知ることができるよう配慮する。	5分
展開	離乳開始から完了までの発達と援助についてDVDを視聴しながら学ぶ。	DVDの視聴を通し、実際の子どもの姿と照らし合わせながら、離乳の開始から完了までの子どもの発達(心身の発達、咀嚼の発達、口腔内の発達)と調理形態の変化について説明する。	30分
説明	活動の説明を受ける。	手順を説明した後、感想を研究に使用する旨を説明する。クラッカーを配布する。	5分
活動	Eating-Feeding 相互模擬演習を行い、感想をワークシートに記入する。	タイミング不一致パターンを双方の役を交代して行った後、共時的咀嚼パターンも同様に双方の役を交代して実施する。各回ごとに感想を記入する時間をとる。	40分
発表	数人の学生が、ワークシートに記入した文章を読み上げる。	それぞれの学生が感想を述べた後に補足説明を行う。	5分
振り返り	ワークシートの振り返り部分を記入する。	「食事援助で大切にしたいことは何か」を記入するよう伝える。	5分

表2 Eating-Feeding 相互模擬演習の方法

タイミング不一致パターン	① M がクラッカーの 1/2 枚を C の口に入れる。 ② M は C が半分食べたと思ったあたりで、次のクラッカー 1/2 枚を C の口元に持ってくる。
共時的咀嚼パターン	① M がクラッカー 1/2 枚を C の口に入れ、M は C と一緒にモグモグと口を動かす。 ② M は C が 1/2 枚を食べ終わったタイミングで、次のクラッカー 1/2 枚を C の口の中に入れる。

*各パターン共に、2名1組で母親役(M)・子ども役(C)になり、①②を行う。終わったら役を交代して同様に①②を行う。

ける。共時的咀嚼パターンでは、母親役が子ども役の口の動きに同期させながら自らの口を動かし、子どもが食べ終わってから次の一口を口の中に入れる。各パターン共に、母親・子どもそれぞれの役を経験した後に、役を体験しての気づきを感想として自由記述形式で記述した。

(4) 研究における倫理的配慮

演習に参加する学生に対し、①研究目的、②感想を研究に使用することの同意の可否は自由意志で決定できること・不同意の場合にも成績評価等への影響はないこと、③感想は匿名記入とし個人が特定されることのないよう厳重に管理されること、①～③を説明し了承を得た上で実施した。

(5) 分析の方法と手順

演習で感想を記入したワークシートを分析対象とし、各パターン・役ごとに分析を行った。記述は質的な意味をもとに一記録単位とし、個々の記録単位にラベルを付与した。付与したラベルの類似性に基づき分類し、分類したものにカテゴリー命名(サブカテゴリー作成)を行った。サブカテゴリーの類似性に基づき、カテゴリー命名(カテゴリー作成)を行い、さらにカテゴリーの意味側面に着目して分類し、カテゴリー命名(メインカテゴリー作成)を行った。

3. 結果と考察

(1) タイミング不一致パターンにおける母親役の記述

タイミング不一致パターンにおける母親役の記述の分類結果を表3に示す。感想の記述は、援助者

表3 母親役の気づき(タイミング不一致パターン)

子どもの状況の認知	子どもの心情の推測	子どもの焦り(4)/子どもが嫌がる姿(2)
	口の中の状況の気づき	口の中にまだある(1)/味が混ざるのでは(1)
食べ方への影響	マイナスの効果	食べるのが大変そう(2)/急かされている(1)/意識が次の食べ物に向く(1)
援助者の状況	インターバルの気づき	タイミングの難しさ(17)/半分の予想が難しい(11)/どれくらい食べたか分からない(7)/予想より食べる時間がかかる(7)/食べる早さが分からない(3)
	援助行為が及ぼす影響	急かしている(8)
	「食べさせる」ことへの意識	テンポよく食べさせられる(2)/早く準備してしまう(1)
	無意識の行為	無意識に口元に運ぶ(1)
援助者の心情	待つことへの戸惑いや苛立ち	急かしたくなる(4)/待つ時間における否定的感情(3)/待たせたくない(1)
	「食べさせる」行為への心情	食べさせなければという意識(3)/作業のようだ(1)
	援助の正しさへの不安	不安(1)

の視点から見た子どもの状況が記された《子どもの状況の認知》《食べ方への影響》、援助者としての視点から記された《援助者の状況》《援助者の心情》の4つのメインカテゴリーに分類された。《子どもの状況の認知》《食べ方への影響》では、子どもが食べ終える前に次の一口を口の前に持ってきたことにより、サブカテゴリー〔子どもの焦り〕〔食べるのが大変そう〕に分類されるような子どもの姿を感じ取っていた。《援助者の状況》では、カテゴリー〈インターバルの気づき〉に分類される記述が多くみられ、17名が〔タイミングの難しさ〕、11名が〔半分の予想が難しい〕、7名が〔どれくらい食べたか分からない〕の各サブカテゴリーに分類される記述をしており、「子ども役が半分食べたと思ったあたりで」という教示に戸惑いを覚えた学生が少なくなかったことが窺われた。また7名がサブカテゴリー〔予想より食べる時間がかかる〕に分類される記述をしており、一口量を咀嚼するのにかかる時間を認識する機会となっていたことが窺われた。また、学生の感想では、「口元をよく見ていないと子どもの様子につかめず上手にできないと思った」「口の中に入っていてどれくらい食べ終わっているのか分からないので次をわたすタイミングが難しかった」等の記述がみられた。これらの記述からは、咀嚼の状況を視覚的に推測しようとする中で、その難しさを感じていたことが窺われた。《援助者の心情》では、4名が〔急かしたくなる〕に分類される記述をしており、「なかなか食べてくれないので、早く早くといった気持ちが生まれて楽しめないと思った」「子どもに早く食べて？ まだ？ などと思ってしまった」等の記述がみられた。同様に〔待つ時間における否定的感情〕では「口の前で待っている時間が気まずい」「子どもが食べるのがゆっくりなので待ちきれずに次のものを差し出してしまう」等の記述があった。子どもが食べ終えるのを「何もせずに待つ」行為は気まずさや、次の一口を待ちかまえる姿勢につながり、援助者自身に戸惑いや苛立ちを生起させる可能性が推察された。また、〔食べさせなければという意識〕〔作業のようだ〕では、「ただ、食べ終わるのを待つ時間でした。ご飯を食べさせないと！ という感覚でした」「おやつをあげるのが作業のように感じた」等の記述があり、そこには援助過程で生じるであろうコミュニケーションの楽しさといった肯定的な心情とは程遠いものが生じていたことが読み取れた。

(2) タイミング不一致パターンにおける子ども役の記述

タイミング不一致パターンにおける子ども役の記述の分類結果を表4に示す。記述は《子どもの心情》《食べるプロセスの認識》《援助が及ぼす影響》の3メインカテゴリーに分類された。《子どもの

表4 子ども役の気づき（タイミング不一致パターン）

子どもの心情	不快感	急かされている (33)/焦り (16)/早い (5)/味わえない (3)/落ち着かない (2)/圧迫感 (1)/まだ口を開けたくない (1)/まだ待ってほしい (1)/大変 (1)
	反射的に生ずる気持ち	途中でも次を食べてしまう (5)
	援助者の意図の察知	急ぎたい意図の察知 (1)
食べるプロセスの認識	口の中の状況の気づき	歯を使わないで食べる状況の理解 (2)/適量の理解 (2)/食べ物性状の認識 (1)
	インターバルの気づき	時間がかかった (2)/半分のタイミングが分からない (1)
援助が及ぼす影響	マイナスの効果	自分のペースで食べられない (3)/食べにくい (3)/咀嚼回数減少 (2)/急いで咀嚼する (2)/のどに詰まる (2)/食べる意欲の減退 (1)/
	プラスの効果	食べやすい (1)/食べる意欲の増進 (1)

心情》ではカテゴリー〈不快感〉に分類された記述が多くあり、特にサブカテゴリー〔急かされている〕は33名、〔焦り〕は16名が言及していた。「口元にクラッカーがくると、早く食べなきゃと催促されている気持ちになった」「急かされている感じがして、食べ終わっていないのに次のクラッカーを口に入れてしまった」「まだ食べているのに次のものを出されたから早く食べなければと焦ってしまった」等の記述からは、援助者が早く食べることを強制しているわけではないが、目の前に次の食べ物があるだけで食べる側は〔急かされている〕〔焦り〕といった心情になることが推察された。また、〔途中でも次を食べてしまう〕は5名が記述しており、「まだ食べ終わっていないけど、目の前に出されたから口の中に残っているが次のものを食べてしまった」等の記述がみられ、目の前に食べ物が出されると反射的にそれを食べようとしてしまうことが窺われた。こうしたことが実際の保育場面で起こると、口の中がいっぱいになり、噛めない・丸呑みにつながりうる。こうした体感からの気づきを学生間で共有することも、貴重な学びである。《食べるプロセスの認識》では、「食べ終わるまで自分が思ったより時間がかかった。子どもは自分の倍ぐらい時間がかかるのかなと思った」といった〈インターバルの気づき〉、「意外にクラッカーはパサパサしやすく、口の中に残りやすいため、飲み込むのが大変」と食品の性状にも言及した〈口の中の状況の気づき〉などがあった。日常繰り返している「食べる」行為ではあるが、インターバルや咀嚼を意識して自らの食べる行為を客観視したからこそ生じた気づきである。こうした自らの体感を通した気づきは、子どもの側に立って理解しようとする上で重要なことであろう。《援助が及ぼす影響》では〈マイナスの効果〉に関する記述がみられた。「自分のペースを保つのが難しかった」といった咀嚼ペースへの影響、「よく噛まないで飲み込んでしまうので噛むことも学べない」「口がモグモグするスピードが早くなる」等の噛む回数や速度への影響にとどまらず、「焦ってつまらせてしまいそうになる」と危険性を感じたことを記している学生もいた。また、「まだ食べ終えないタイミングで口の近くに食べ物があると、食べようとする意欲が失われる気がした」との記述からは、子どものペースと合致しない援助は食べる意欲にも影響を及ぼす可能性があることも推察された。

(3) 共時的咀嚼パターンにおける母親役の記述

共時的咀嚼パターンにおける母親役の記述の分類結果を表5に示す。《子どもの状況の認知》では

表5 母親役の気づき（共時的咀嚼パターン）

子どもの状況の認知	食べる状況を読み取ること	咀嚼の状況の理解 (14)/食べ終わりのサイン (1)
	インターバルの気づき	タイミングが分かる (11)/食べるスピードの理解 (2)/時間がかかる (1)
	子どもの心情	笑顔 (3)/子どもの意欲 (1)
援助が及ぼす影響	プラスの効果	口の動きの増進 (3)/食べやすそう (1)
援助者の状況	かかわりへの影響	コミュニケーションがとれる (6)/言葉がけができる (3)
	よく観察できる	よく観察できる (5)
援助者の心情	ポジティブな感情の生起	楽しさ (16)/嬉しさ (1)
	子どもとの関係性	一体感 (10)
	心の余裕	ゆとり (4)/焦らない (3)
	援助者の大変さ	大変さ (1)

サブカテゴリー〔咀嚼の状況の理解〕〔タイミングが分かる〕に分類される記述が多くみられた。「一緒にモグモグすることによって、相手の口の動作やまだ飲み込んでいない状況が分かりやすかった」「一緒に口を動かすことを意識すると、自然と子どもをよくみて、食べ終わるタイミングをしっかりと見極めることができた」「自分もモグモグしているので子どもが飲み込むタイミングが分かりやすかった」等の記述があり、共時的咀嚼がタイミングの理解や子どもの口の動きをよく観察しようとすることにつながっていたことが窺われた。《援助が及ぼす影響》においては「子どもが母親に合わせて一生懸命咀嚼する姿が見られた」「次に欲しい意欲がパターンI（タイミング不一致パターン）よりも大きい気がする」等、共時的咀嚼が子どもにプラスの効果を及ぼしていたことを示す記述があった。《援助者の状況》では、「子どもと同じ動きをしたことで、子どもと関わっているという気持ちが強まった」「おいしい？ 等、自然と声がけができた」の記述がみられ、かかわりに好影響を与えていたことが推察された。またタイミング不一致パターンと異なり、《援助者の心情》に関する記述が多くみられ、16名が〔楽しさ〕、10名が〔一体感〕に分類される記述をしていた。〔楽しさ〕の記述では「モグモグと一緒に食べているようにすることで食事を一緒に楽しむことができた」「一緒にモグモグと口を動かすことで、子どもがそれを真似して楽しく食べられることができた」等、ポジティブな感情の生起がみられた。また、「一緒にモグモグと動かすことで一緒に食べてる、同じ時間を共有できた感じがした」「子どもと一緒にモグモグすることで、こっちまで食べてるような感覚になった」等の記述からは、テンポの共有にとどまらない共時的咀嚼による効果が窺われた。咀嚼という身体の動きを伴うことを通して援助者側も「食べる」行為を疑似的に経験することになり、記述にあるように「子どもと同じ時間を共有する」感覚を体感できたのだと推察される。また「食べ終わるまで待つと、食事全体にゆとりが生まれると感じた」「子どもと同じ気持ちになることができ早く食べてほしいと待ちきれずに次のものを差し出すことがなくなった」との記述からは、タイミング不一致パターンと同じ「待つ」行為であっても、「食べさせる」ことを目的とする援助者としての思いが先行するのではなく、子どもの経験を「共に」することで援助者役に心の余裕をもたらしていたことも推察された。

(4) 共時的咀嚼パターンにおける子ども役の記事

共時的咀嚼パターンにおける子ども役の記事の分類結果を表6に示す。メインカテゴリーは、子ども役を経験して感じた《子どもの心情》、自らが経験した《子どもの状況》、共時的咀嚼という《援助が及ぼす影響》の3つに分類された。《子どもの心情》では、35名の学生が〔楽しさ〕に言及してお

表6 子ども役の気づき（共時的咀嚼パターン）

子どもの心情	援助者との関係性	楽しさ (35)/一体感 (11)/安心感 (6)/気持ちの共有 (1)
	味の感じ方	味わえる (7)/美味しく感じられる (2)
	心の余裕	落ち着いて (7)
	食べる意欲	もっと食べたい (2)
子どもの状況	かかわりへの影響	見てくれている (2)/顔を見る (1)/コミュニケーション (1)
	半意図的な学び取り	口の動かし方を学ぶ (1)
援助が及ぼす影響	プラスの効果	咀嚼への好影響 (9)/食べやすい (9)/のどに詰まらない (1)
	ペースの尊重	急かされない (10)/自分のペース (5)
	同調性	タイミングが良い (3)/リズムの同期 (2)

り、「一緒に食べている気がして、嬉しくて、楽しく食べることができた」「こっちを見ながらモグモグしていることによって、一緒に食を楽しめた」等の記述があった。また、「母親と一緒に口を動かすことで、一緒に食事をしている、と感ずることができたし、とても楽しかった」の記述のように〔一体感〕に言及した学生が11名おり、母親役のみならず子ども役もまた、援助者の共時的咀嚼という行為を通し、一体感を感じていたことが推察された。また、「お母さんが一緒に食べてくれている安心感があった」と〔安心感〕に言及した学生も6名おり、共時的な援助姿勢が子どもと援助者の関係性に好影響を与えていたことが推察される。「一緒にモグモグしてもらうことで焦ることなく落ち着いて食べることができた」と〔落ち着いて〕に言及した学生も7名いた。さらに「よく噛んだからか、味もしっかり味わうことができた」「パターンI（タイミング不一致パターン）の時よりもクラッカーがおいしく感じられた」と味の感じ方にまで影響を及ぼしていたことを示す記述もあった。《子どもの状況》では「一緒に噛む動作をしてくれるだけで自分のことを見てくれていると思えた」「お母さんの顔をじっくり見ながら食べた」等の〈かかわりへの影響〉に分類される記述がみられた。子どもの口元を見て援助者が共に口を動かそうとすれば、必然的に子どもの顔をよく見つめることになる。子どもが咀嚼している間に、次の一さじを準備する場合よりも子どもの顔を見つめる時間は長くなるだろう。こうしたことは、共時的咀嚼という援助姿勢をとることが、「口に食べ物を運ぶ」という物理的な援助にとどまらず、「援助者—子どものコミュニケーション」の意味合いを含む援助となっていたことを意味するのではないだろうか。また《援助が及ぼす影響》では、〔咀嚼への好影響〕〔食べやすい〕に言及した学生がそれぞれ9名ずつおり、「母親がモグモグしてくれることによって、一緒に食べている感じがして噛む速度が増した」「一緒にモグモグしてくれることによって、食べやすかった」等の記述から、〈プラスの効果〉を及ぼしていることが読み取れた。〈ペースの尊重〉では「一緒に食べているという感じで焦らず美味しく食べれた」「自分のペースで食べられるので、無理なく食べられた」等、10名が〔急かされない〕、5名が〔自分のペース〕に分類される記述をしていた。「飲み込むところまでMと一緒にやってくれたので、とてもタイミングがよかった」とする共時的咀嚼によるタイミングの合致や、援助者が子どもの口の動きに合わせるだけでなく、「無意識で母親のリズムに合わせてモグモグしていた」と双方向の同期が生じていたことが窺われる記述もあった。

4. 総合考察

(1) Eating-Feeding 行為を経験しての気づき

学生にとって Eating-Feeding 相互模擬演習は、「食べる」「援助をする」という行為自体を客観的に見つめる機会となっていたようだった。「食べる」行為は誰もが日々繰り返し経験していることであるが、そのプロセスを考える機会はないのではないだろうか。子ども役の気づきでは「意外にクラッカーはパサパサしやすく、口の中に残りやすいため、飲み込むのが大変」と、食物の食感についての記述がみられたが「意外に」という言葉からは、なじみの薄い食べ物ではないはずだが改めて意識してみると、咀嚼・嚥下が難しいことに気づいたことが読み取れる。大人であれば、食べるという行為は余程慣れない食べ物でない限り「どのように口を動かすのか」を意識せずに行うことのできる、言わば自動化されている行為である。しかし、食べることへの経験の度合いが大人とは異なる子ども、特に離乳期の子どもに援助をする際には、子どもの側に立ち、大人にとっては自動化されている行為について、段階を踏んで子どもの摂食機能をイメージし、その発達に応じた援助を意

識する必要がある。また、「援助する」という行為に関しては、両パターン共に母親役の記述として〈インターバルの気づき〉に分類されるものが多くみられた。〔半分の予想が難しい〕〔タイミングの難しさ〕など他者が食べるときの口の中の状況を推測することへの難しさに関する気づきがあった。他者が食事する姿を目にすることは日常的なことでありながらも、口の中の動きまで意識して観察する機会は少ない。口の中の動きは外面から観察可能な部分もあるが、舌のどの部分を使っているのか等の理解は視覚的な観察に加え、咀嚼に関する知識も必要である。演習を通してその難しさに気づいたことは、より強く子どもの口の動きを「意識する」契機となったのではないだろうか。理論と実践をつなぐ体感的な気づきを与えようような学びの機会の提供は、子どもへの適切な援助のヒントを得るものとして、養成教育の中に意識的に取り入れていく必要があるだろう。

(2) 2つの条件下での Eating-Feeding 行為の気づき

本研究では、タイミング不一致パターン・共時的咀嚼パターンの2つの条件下で演習を行った。タイミング不一致パターンは、子ども役が半量食べたと思ったところで、母親役が次の一口を子ども役の口元に持ってくるという援助を行った。母親役は子どもの口に無理に食べ物を入れたわけではなかったが、多くの学生は子ども役の気づきとして〈不快感〉や〈マイナスの効果〉を挙げていた。母親役の気づきにも、子どもが食べるのを待つことについての戸惑いや苛立ち、「食べさせなければ」という意識が生じていたことが挙げられており、こうした援助姿勢は子ども役だけでなく援助者にとっても負の感情を生起させることが推察された。苛立ち等の感情は、援助者の「食べさせなければ」という思いを強め、結果的に子どもの「食べたい」気持ちやタイミングとの不一致がより生じやすい状況になりかねない。不一致パターンにおいて双方の立場でそれぞれの負の感情を経験したことで、適切な援助とは何かを考える契機を得たのではないだろうか。

一方、共時的咀嚼パターンでは、母親役では、子どもの咀嚼の状況を理解しやすくなる効果や心のゆとりなどの〈ポジティブな感情の生起〉に分類される記述がみられた。子ども役では、咀嚼や食べやすさへの効果や安心感といった感情に加え、味の感じ方にまでプラスの影響を及ぼしていた記述もあった。さらに、母親役・子ども役双方に、楽しさや一体感等の感情をもたらしていた。すなわち、共時的咀嚼パターンでは、リズムの同期による援助行為や食べる行為自体へのプラスの効果にとどまらず、双方の心情面にもタイミング不一致パターンとは対照的な効果をもたらしていた。

では、共時的咀嚼パターンでは、母親役・子ども役の間にどのようなプロセスが生じていたのだろうか。記述を分類したカテゴリーから仮定したプロセスを図1に示す。母親役が子ども役の口の動

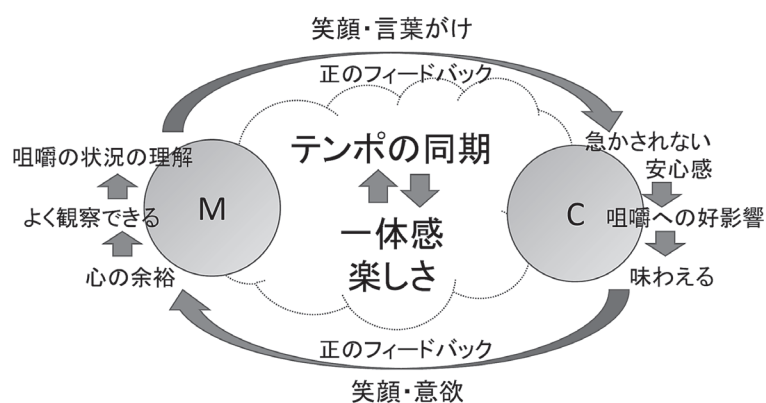


図1 共時的咀嚼パターンでの二者間における心的プロセス

きに同期しようとする口の動きをすることで、子ども役もまた母親役の動きに合わせてようとする相互調整が起こり、結果としてお互いのテンポが同期されていった。相互調整の過程で両者の間には一体感や楽しさといった心情が生じていた。母親役の援助姿勢から子ども役は自分のペースが尊重されていると感じられることにより、急かさず、安心感の中で食べることができ、さらには咀嚼への好影響を与えていた。また、十分に咀嚼できることが、より味わって食べることや、美味しいと感じられることへとつながり、子ども役の笑顔や次の一口を食べようとする意欲等の正のフィードバックとなって母親役の目に映る。結果、母親役は心の余裕ができ、子ども役の姿をよく観察し、咀嚼の状況の理解へとつながっていた。また、母親役から笑顔や自然な言葉がけが表出されることで、子ども役側にも正のフィードバックがあり、両者の間で好循環が起こっていたことが推察される。食事援助という言葉からは、援助者が子どもの口に直接的に食べ物を運ぶ一方向の行為を思い浮かべるだろうが、援助者の「共に」という間接的ともいえる援助姿勢のあり方にも着目すべきであろう。相互の関係の中で生じる「楽しさ」「安心感」が、日々の生活に欠かすことのできない食事場面で体现されることは、人に対する基本的信頼感を培っていくこの時期には特に大切にされるべきことであろう。

(3) 離乳期の食事援助の充実に向けて

離乳期における食事援助は、食べ物を口に運ぶという援助者から子どもへの一方的なかかわりではなく、そこにある子どもの意思を援助者が感じ取り、子どもの手となり口に運ぶ言わば二人羽織の関係を経て(外山, 2013)、子どもが主体となって食べる行為を獲得するプロセスを後ろ支えすることだと考える。援助者側の思いや願いばかりが強調され、子どもの姿や要求に目が向けられていない場合には、二者間に不調和が生じる。今回の演習でのタイミング不一致パターンにおける援助は不調和の1つの例であろう。不調和の中、二者間に生じたものは不快感やマイナスの効果であった。大人の思いと子どもの思いの不調和は、育ちの様々な側面で現れるものである。そうした場合には、「大人が子どもに寄り添う」または「子どもが大人に導かれる」という調整が生じる。共時的咀嚼では、子どもの口の動きに援助者が合わせて口を動かし、その動きを見て子どももまた口の動きを調整していく相互調整が生じるが、援助者の口の動きには「子どもに寄り添う」「自分の口の動きのように子どもが口を動かすよう導く」という双方の意味が含まれており、子ども側もまた「寄り添われることでの安心感」と共に「援助者の口の動きに導かれることによる咀嚼の促進」等の作用が生じる。すなわち援助者は子どもの姿に「成り込み」、同時に子どもを「こうあってほしい」という願いに「巻き込み」といった入れ子構造のような相互調整が起こる中で(鯨岡, 1999)、子どもの安心感や信頼感を育み、援助者は「ほどよい援助」を体得する中、「共に」育っていく存在となるのであろう。援助者は「援助する」といった一方向の動きばかりに目を向けるのではなく、二者の間で「共に」育まれるという観点を忘れてはならない。

5. おわりに

食事援助の場合、直接的援助や言葉がけばかりに目を向けがちであり、ともすると目の前にあるものを子どもに残さず与えなければならないという観念に囚われ、子どもの姿や思いに目を向けず援助者の思いを前面に出してしまう場面も少なくない。しかしながら、乳幼児期の食事場面においては、食べることの楽しさや喜びを共に経験し、食への意欲を育てていくことが何にもまして重要であることは言うまでもない。保育士養成課程の見直しにより乳児保育の充実が図られ、演習科目である「乳

児保育Ⅱ」が必修となることから、さらに子どもへの援助の実際が体感できるような演習内容の充実が求められるだろう。乳児保育においては、「保育者が子どもの目となり世界を見つめることによる子どもの心情への共感」と「保育者としての願いと意図」との双方の視点をもって援助を考えることが大切である。食事援助は「子ども」と「保育者」の2つの主体が相互調整をしていく象徴的な場面である。今回の演習のように、援助のプロセスを体感し、それを客観視する機会を提供することは、二者間の心の動きを意識する契機となるものであろう。食事援助はもちろんのこと、生活や遊びのあらゆる側面で、「子ども」「保育者」という双方の視点をもって保育ができるよう、養成課程での学びを検討していくことは、質の高い乳児保育の実現の基盤となるものであると考える。未来の保育者によりよい援助を考える契機を与え、質の高い援助を体現していく力を養成できるよう、効果的な学びのあり方について今後も研究を重ねていきたい。

引用文献

- 遠藤純子・小野友紀（2017）保育所における食をめぐる多層的な問題へのアプローチに関する考察—保育者の葛藤やジレンマに着目して—。学苑（920），32-51.
- 川田学・塚田（城）みちる・川田暁子（2005）乳児期における自己主張性の発達と母親の対処行動の変容：食事場面における生後5ヶ月から15ヶ月までの縦断研究。発達心理学研究 16（1），46-58.
- 小林美希（2015）ルポ 保育崩壊。岩波新書。
- 鯨岡峻（1999）関係発達論の展開：初期「子ども-養育者」関係の発達の変容。ミネルヴァ書房。
- 森田悠子・高木道代（2013）保育士による離乳の援助の現状。佐野短期大学研究紀要（24），59-68.
- Negayama K. (1993) Weaning in Japan: A longitudinal study of mother and child behaviours during milk- and solid-feeding. *Infant and Child Development*. 2（1），29-37.
- 外山紀子（2013）離乳食場面における乳児と母親の相互調整：視線を手がかりとした分析。人工知能学会全国大会論文集 27，1-4.
- 厚生労働省（2017）保育士養成課程等の見直しについて～より実践力のある保育士の養成に向けて～（検討の整理）。
http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/houkokusyo_1.pdf. 2018年5月10日最終アクセス
- 厚生労働省（2018）指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について。
http://www.hoyokyo.or.jp/http://www.hoyokyo.or.jp/nursing_hyk/reference/index.html/material4.pdf. 2018年5月10日最終アクセス

付 記

本研究は JSPS 科研費 17K01914 の助成を受けたものです。

（えんどう じゅんこ 初等教育学科）

（おの ゆき 武蔵野短期大学幼児教育学科）

（いけや まりこ 和洋女子大学家政学部家政福祉学科）